

飛鳥翁の生い立ちと祭祀

長濱 幸男（宮古島市史編さん委員）

目次

はじめに

- | | |
|---------------------|---------------------|
| 1-1. 『宮古島記事仕次』孫娘の婿説 | 6. 飛鳥翁の功績、領土5カ村建設 |
| 1-2. 『宮古島庶民史』孫娘の婿説 | 7. 飛鳥翁亡き後の「西銘間切」 |
| 2-1. 『宮古史伝』の孫説 | 8. 飛鳥御嶽の始まり |
| 2-2. 『宮古史伝』に基づく孫説 | 9. 飛鳥御嶽の年間祭祀 |
| 3. 飛鳥翁の生い立ち検討 | 10. 飛鳥御嶽 皿ピャーす儀礼の事例 |
| 4. 『宮古史伝』の孫説は疑問 | 11. 飛鳥御嶽の遙拝所（中通イ御嶽） |
| 5. 飛鳥翁生い立ちの見直し | まとめ |

はじめに

飛鳥翁^{とびとりや}については、白川浜の決闘のことや俊足のことがよく知られている。しかし、飛鳥翁の生い立ちは、いまひとつ明らかでない。その理由は、飛鳥翁の出自について、2つの説があるからである。1つは、飛鳥翁は炭焼太良^{かまおや}（嘉播親、初代西銘按司^{にしめあじ}）の孫娘の婿であるという説である。これは『宮古島記事仕次』の記事に基づくものである。

2つは慶世村恒任^{きよむら}の『宮古史伝』によるもので、飛鳥翁は炭焼太良^{すみやきたる}（初代西銘按司）の孫、つまり炭焼太良の次女・目娥津喜^{めぐつぎ}の息子とする説である。慶世村は、宮古研究の父とも言われるほどの著名な歴史家である。その影響は大きく、飛鳥翁の生い立ちについては、多くの郷土史研究家がこれまで慶世村説に基づく論調を述べていた。

小論では飛鳥翁の出自^{しゅつじ}について、2つの説がある中で、どれが正しいのか検証してみた。あわせて飛鳥翁は、どのような功績を残したのか、飛鳥翁亡き後の西銘村の動向、飛鳥御嶽の始まりと祭祀などについても調べてみた。

なお、炭焼太良（嘉播親）は初代西銘按司として西銘城を築き、その跡継ぎは、西銘こじさかりで、西銘の按司と記されている。初代西銘按司と後継者の西銘按司との混乱を避けるため、初代の名称を地域になじまれた「炭焼太良（嘉播親）」と呼ぶことにした。

1-1. 『宮古島記事仕次』孫娘の婿説

一飛鳥爺は、炭焼太良の次女目娥津喜の娘（孫娘）の入婿である一

『宮古島記事仕次』は、忠導氏で友利村の主長（首里大屋子）が、古老から聞き取りしてまとめた宮古の古事を、首里王府から派遣された在番筆者・明有文長良が校訂した著作である。平家物語風のすぐれた文章でまとめられている。今から270年前（1748年）にしるされたものである。

これによれば、初代の西銘按司は若い頃、炭焼太良と呼ばれていた。久松からきた真氏を嫁にしてから、鍛冶の技術を活かして農具をつくり、百姓たちに分け与えたようで、村の人たちから嘉播親と尊敬された。まもなくして西銘城を築き上げ、3男2女を設けた。男の子は、みな親不孝者で分家された。2人の娘は優れもので、長女が根間家に嫁ぎ、目黒盛豊見親の母となる。炭焼太良（嘉播親）と暮らすのは、次女のみ娥津喜だけとなった。次女が年頃になったため、西銘按司は婿を迎えることとなった。その婿が西銘のこじさかりである。こじ昌とも記された人で、二代目西銘の按司である。2人の間に生まれた娘が於母婦である。この於母婦が成人となった頃、婿を探す様子が『宮古島記事仕次』には、次のように書かれている。

『宮古島記事仕次』

むかし、西仲宗根のぬし保里天太という人、2人の子を設けた。嫡子保古利屋盛、二男くじさかりといふ。該ほくりや盛ハ天性おほやうにして無能なり。二男居士佐加利ハ器量骨柄人に勝れ、容貌美にして、しかも兵法の達人なり。……保古利屋盛の婦人、おもたる孝行のしるしにや、玉のような男子を設け、成人するに随て長者の風ありと聞へしか、後にハ糸数の大按司と名のり、肩をならふるものなし。

扱、こじさかり兄にせばめられ箕の隅に居をしめし、彼村のぬしとなり、男子を設けたり。童名・真徳金、後に飛鳥爺と称す。是は其の勇猛虎の如く、其の健なる事飛鳥のこととして、其の名を得るなり。

又、其比西銘の按司という長者あり。比人ひとりむすめあり。又、其名を於母婦といふ。嬋娟たるにほひあてやかにして1たひゑめハ傾国のの色あり。

按司是を寵愛する事掌上の珠のことし。あはれ佳婿を求めて帰らしめ、我跡職をも譲らんとおもふ所に、該飛鳥爺の武勇を聞及ひ、いかにもして、まねきよせんと思案をめぐらせともおよバス、いかがハせんと思案を胸をこかす折ふし、西銘のつかさといふ老婦来ていふやう、我に一斗の餅を作りて給ハハ、かの飛鳥爺を此所江まねきよせんとな

り。按司、其謀を問へハ、かやうくと答ふ。按司大きによろこひ餅を老婦に與へしかハ、箕の隅村江持行、童へ共に是を與へて曰、我ハ神女なり。汝等に幸を教るなれとて、おやごをうたひてならハしむに、神女の教えなれハ心をととめて、やかて受覚ぬ。このあやごのころハ、西銘のひとりむすめ、おもふ、其容貌玉のこくにして、世にたぐいなし。飛鳥爺ならずして誰か是を求めむ。とひとりや、是を娶らハ、西銘のぬしハ、飛鳥爺ならずして誰そや、となり。

このあやご遠近に聞へしかハ、とひとりやも神の告たた事ならずとて、西銘間切に尋行て徘徊す。先日のつかさ兼ておもい設けし事なれハ、とひとりやを導て按司江通す。按司やかて召寄せて対面するに、其容貌尋常ならず、堂々たる威風、神のことし。志すましたりとよろこひ語て曰、ここにも神の告げ有て、内々通達せんとおもひとも、賢慮の程いかかあらんと恐れなして、黙止居たる所に、今日幸に光臨を得て素懐を慰するに足れりとて、やかて婚礼かたのこくとりおこなひ、入婿として西銘のぬしとなる。是より威風遠近に振ひ、いよく名高くなりけり。

付録

西銘城は未申（南西）に向ふ。長 90 間横 46 間、其跡形今に存せり。西銘間切ハ、西銘村・おわて村・伊こむ村・きやけ村ありしとなり。

以上は『宮古島記事仕次』にしるされたもので、飛鳥爺と於母婦が結ばれた経緯と飛鳥爺の生い立ちを知ることができる。次に、稲村賢敷の『宮古島庶民史』をとりあげてみよう。

1-2. 『宮古島庶民史』孫娘の婿説

稲村賢敷の『宮古島庶民史』は、『宮古島記事仕次』を忠実に守って書かれている。引用してみよう。

嘉播の親と真氏（野崎村長井の里からきた女性）の間にできた子は、嫡子伊佐盛、次男斗佐盛、三男武佐盛といい、何れも大不幸の者で親の心に叶わず家財を分かち与えて別居す。二女のうち長女は思めがと言って根間大按司の二男根間角が一ら天太という人の妻となり、目黒盛豊見親を生む。（目黒盛豊見親の子真角与那盤、その子普佐盛、その子真誉の子、その子仲宗根豊見親なり、いまに至るまでその一族鱻を食わず、と伝えられている）。

次女はめがつきとって西銘こぜさかりの妻となり家統を継ぐ。この人、後に西銘の按司と称す。二女共に孝女にして子孫繁昌極りなし。・・・・

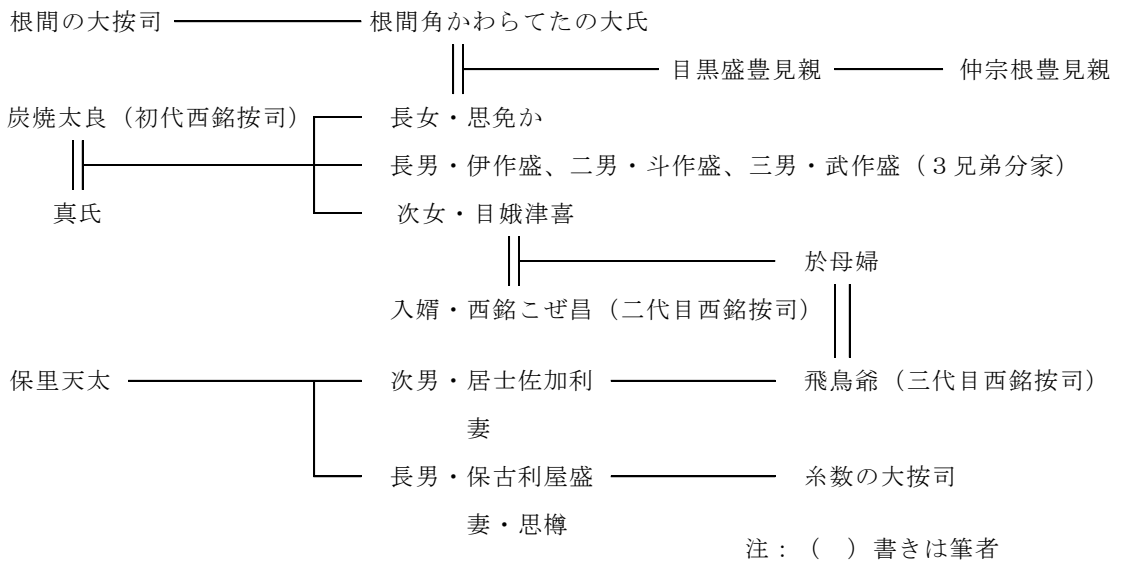
西銘の里は、現在増原部落から西方 4 町程の所に屋敷跡のあるのがそれであろう。その西 30 間、南北 15 間位で門は東に開いている。北は海岸断崖の上に当り、石垣が繞

らされている。嘉播の親が西銘の主と称して以来、西銘按司こぜさかりを経て驍勇飛鳥翁がその女婿となって西銘城主となり、武威を四隣に振うようになって域地の狭隘を感じ、新しく飛鳥城を築城してこれに移るようになるまで此処に西銘按司の居城があったものである。西銘は古く間切の名称もあって、西銘村の他に、おはて村、いこむ村、きやき村の4ヵ村領有したと『宮古島旧記』にはあるから、西銘城は東南遙か長間部落に至るまでその領内であった。（____は著者がひいた）

この稲村と同様のことを、仲宗根將二（1988）は『宮古風土記』で述べている。飛鳥御嶽「由来 祭神は飛鳥翁である。居士佐加利の子真徳金は幼少から勇力人にすぐれ、その早きこと飛鳥のようだというので、人びとは飛鳥翁と呼んで畏敬していた。長じて西銘按司の婿に入った」。新里恒彦（2014）『宮古島の英雄伝』で、「飛鳥翁はくじさかりと目娥月の子の入り婿になった」と述べている。

以上のように『宮古島記事仕次』と稲村の『宮古島庶民史』とそれに基づく論説は、飛鳥翁を炭焼太良の次女・目娥津喜の娘（於母婦）の婿と解釈している。理解しやすいように、家系図（図1）をつくった。

図1 飛鳥翁の系統図《宮古島記事仕次》



2-1. 『宮古史伝』の孫説

一飛鳥翁は炭焼太良の孫一

慶世村恒任の『宮古史伝』は、炭焼太良の孫が飛鳥翁という。次女・目娥津喜の子が飛鳥

爺だというのである。先にみた『宮古島記事仕次』では、孫娘の婿とであった。孫といえば血のつながった血族である。孫娘の婿は、直接血のつながった関係ではない。大違いである。飛鳥爺を、炭焼太良の次女の子とみなした慶世村（1927）の『宮古史伝』を引用してみよう。

皇紀 1980 年の頃、保里天太の嫡子保古利屋盛とその婦人思樽との間に玉のような男子ができた。成人するに従って長者の風格が備わり、後には糸数大按司と名乗って威をふるった。次男の居士佐加利は兄に追い出されて箕隅にのがれて村の主長となり、西銘嘉播親の次女目娥月という女を娶って男子を生んだ。童名を真徳金といい後に飛鳥爺という。これは、その勇は虎の如く、その早いことは飛鳥のようだというので、その名を得たということである。その頃、西銘按司は西銘邑・上手邑・伊郡邑、喜屋慶邑・片手邑を領して覇を称え、勢は盛んなものであった。この人に1人娘があって名を於母婦といった。容姿並びなく傾国の美女であった。按司は掌上の玉の如くこれを可愛がり、よい婿を求めて嫁がしめそして我が後職をも譲ろうと思っていた。その頃、飛鳥真徳金の武名が高かったので按司はこれを如何にもして呼び寄せようと思案していると、そこへニシメの司という老婦が来て云うには、「我に1斗の餅を賜わらば飛鳥真徳金を招き寄せん」と^{はら}肚に一考えあるらしいので、按司はこれに一切を託し餅を与えて立たせた。司は箕隅村へ行って邑の童共を野に集めて餅を与えながら「我は神女であるぞ」と、アヤゴを教えた。

このアヤゴを童共はよく覚えこんだ。そして^{たちま}忽ちの中に遠近にひろがった。真徳金もこれを聞き、「神のお告げならばただには措かれぬ」というので、西銘城下へ訪ねて行って様子をうかがった。するとかの司はかねて思い設けた事であるから、早速真徳金を城内に導いて按司へ通した。按司が呼寄せて見るに、容姿凡ならずおかすべからざる風格を備えているので内心大いに喜び、「ここにも神のお告げがあった」といって程なく婚礼の儀を執行い入婿せしめた。真徳金は、按司の死後、西銘城主となり飛鳥爺と名乗り武威大いに張り、隣城の諸将の恐れる所となった。

2-2 『宮古史伝』に基づく論説

『宮古史伝』は、宮古研究の父と尊敬された慶世村恒任の著作である。比嘉春潮は、宮古史を初めて体系化した古典的名著としてを推奨している。こうした事情もあり、飛鳥爺の生い立ちについては『宮古史伝』に基づく論説が少なくない。その主なものを取り上げておきたい。

第一は、『平良市史』第9巻 御嶽編（1994）の「飛鳥御嶽」の記述である。『平良市史』に掲載された記事であるだけに、その影響は大きい。以下引用する。

飛鳥御嶽の祭神飛鳥爺は、保里天太の次男居士佐加利と西銘城の初代城主嘉播親の次女月娥目夫婦の子である。童名は眞徳金。「其の勇は虎の如く、其の早いこと飛鳥の如し」と言われるように武勇に優れ、足が早く、弓の名人であったようである。眞徳金は、箕の隅で成長した。西銘城主・西銘按司は男子に恵まれず、1人娘だけであった。名を於母婦と呼ぶ。「容姿並びなく傾国の美女」であったようだ。按司は婿を探して後を継がそうとかんがえ武名の高い眞徳金を婿に迎えたいと思うが、良い案が浮かばない。そのようなところへ、西銘村邑の司という老婦が按司に乞うて一斗の餅をつくらせた。そうすれば眞徳金を招いてみせるというので按司は老司に一切を託す。

老司は、箕隅邑へ行き童たちに餅を配り「西銘按司の於母婦は月に照り栄え、花の匂いのする可愛い娘だ。飛鳥眞徳金とは天からの夫婦で、夫婦になったら、天を照らす島を支配するほどに繁生する。」とのアヤゴを教えた。童たちはこれをうたい広め、眞徳金の知るところとなる。眞徳金は天の示す相手ならばと於母婦を訪ねて西銘に向かう。老司は、眞徳金が来ると早速西銘按司へ紹介し、眞徳金の容姿と風格にうわさ通りのものを感じ、娘の婿に迎える。西銘按司の死後、西銘城主となった眞徳金は、人々から飛鳥爺とあがめられ、さらに勢力を増していく。(根間玄幸)

この『平良市史』第9巻 御嶽編(1994)の「飛鳥御嶽」の記事は、『広報みやはら』第3号(1999年6月5日)にも転載され、宮原地域の人たちに読まれている。

第二は、宮国定徳著『宮古の史跡・文化財』(1975)の「飛鳥城跡」の記述である。

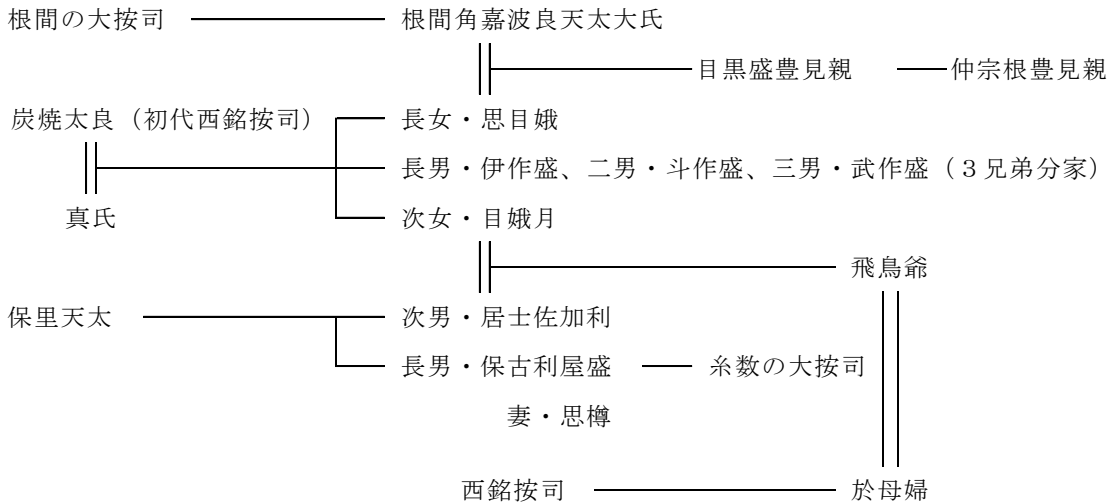
平良の保里城主・保里天太には2人の男子がいた。長男の保久利盛は性格粗放でしたが、次男居士佐加利は文武の道にすぐれていたため、父も家督を弟に譲ろうと日頃から考えていた。長男保久利盛はそれを妬み弟を殺そうとした。弟は逃れて友利の後方山地箕の隅に隠れ住み同地方の領主となり西銘嘉播親の二女目娥月をめとり飛鳥爺(幼名眞徳金)を生んだ。飛鳥爺は後に西銘按司の一人娘於母婦の夫となり家督をついで西銘城主となった。(____筆者)(『平良市史』第8巻 資料編6にも同文掲載)

第三は、沖縄県歴史教育者協議会宮古支部が発行した『宮古の歴史と文化を歩く』(2006)の「飛鳥御嶽」の記述である。

祭神飛鳥爺は、北増原にある西路城の初代城主嘉播親の次女目娥月の子である。童名は眞徳金と言った。その勇は虎の如くで、飛ぶ鳥のように速く走るということで後に飛鳥爺と呼ばれるようになった。時の西銘按司には於母婦という美しい1人娘があった。按司は武勇に優れ、風格のある飛鳥眞徳金に娘を嫁がせる。按司の死後眞徳金は西銘城主となり飛鳥爺と崇められるようになる。飛鳥爺は城を移し、その死後、城は飛鳥御嶽となった。(仲地清成)(____筆者)

『宮古史伝』とそれに基づく論説による「飛鳥爺の生い立ち」を系図にすると、図2のようになる。

図2 飛鳥爺の系統図《宮古史伝》



飛鳥爺の系統図を『宮古島記事仕次』説と『宮古史伝』説の2つをみてきた。ところが、それ以外の説もある。ここでは、第3説としておきたい。

宮原自治会広報『みやはら』第二巻(2002)「東仲宗根添の歴史」として掲載された紙上特別講演である。講師は宮古郷土史家の平良勝保氏である。

平良は「長女オモイメガは、根間の大按司の二男ツノカワラテダの大氏に嫁ぎ、次女メガツキは、保里村から箕の隅に追放されていたクジサカリの子真徳金を婿にした」というのである。(____筆者)

3. 飛鳥爺の生い立ち検討

これまで、飛鳥爺を炭焼太良の孫娘の婿とする『宮古島記事仕次』説と飛鳥爺は炭焼太良の娘の子、すなわち孫とする『宮古史伝』説、それ以外の3説をみてきた。

次女・目娥月からすれば、飛鳥爺は次のように解釈されたことになる。

「飛鳥爺は娘オモフのムコ」説（『宮古島記事仕次』、稲村の『宮古島庶民史』）

「飛鳥爺は自分の息子」説（慶世村の『宮古史伝』）

「飛鳥爺は自分の夫」説（平良の宮原広報紙上特別講演）

これでは炭焼太良や目娥月、そして飛鳥爺という文献史上の人物が粗末に扱われたこと

になる。飛鳥爺の出自を正しく解釈することは、郷土史を正しく理解することでもある。飛鳥爺の出自に関しては、その根拠は『宮古記事仕次』と『宮古史伝』だと考えられるので、3説はのぞいて検討したい。

この飛鳥爺の出自について、問題提起をした論説がある。下地和宏氏の「飛鳥爺の時代 — 村落の消長をめぐって—」『宮古研究』第4号である。下地(1983)は2つの説を比較して、「飛鳥爺が箕隅村の出身で、かつ居士佐加利の息子であることに変わらない。また、於母婦が西銘按司(西銘こぜさかり)の娘であることも同じである。ただ、基本的な解釈の相違は、西銘嘉播親の後継者が西銘按司であったかどうか。飛鳥爺の生母が目娥月であったかどうかである。このことは『雍正旧記』の記述や『記事仕次』の『くしさかり』『こじさかり』をどのように解釈したのかにつけるように思われる」と述べている。

まず、2つの説を具体的に検討するため、家系図を略して比較してみよう。

図3 『宮古島記事仕次』の系統図

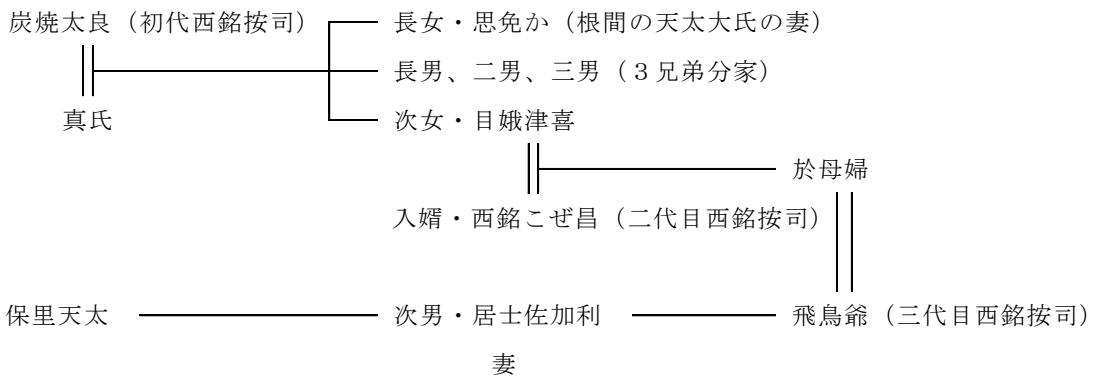
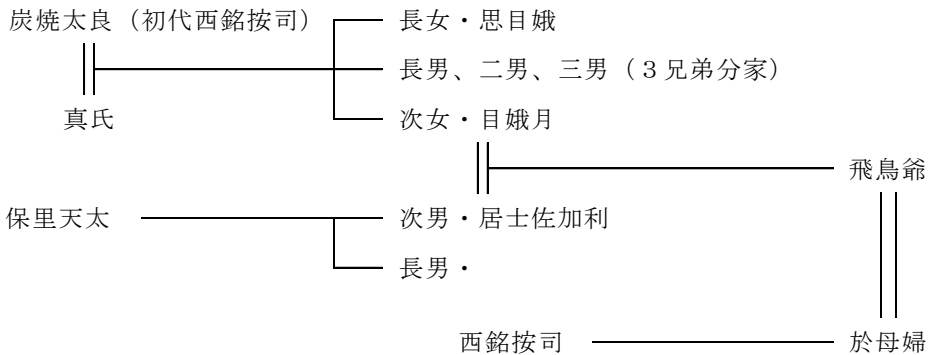


図4 『宮古史伝』の系統図



次に『雍正旧記』を引用してみよう。

「西銘飛鳥城長壺町3拾間横4拾6間門は未申之間二向フ。右由来ハ昔西銘間切之主こぜさかりと申すもの之男子童名真徳金云もの有之若年之頃より勇力人に勝り別て走りの達人にて人皆是を飛鳥と名を付為申由候然ハ父こぜさかり死去之後其跡を継西銘村井おワて片手伊こむきやけ5ヶ村の主と成威勢張居候」（『雍正旧記』1727）

あわせて中山王府の正史『球陽』の「789 宮古山に長間邑を建設す」の項を引用する。

往昔の時、西銘郡主古世佐嘉利に1男有り。乳名を真徳兼と曰ふ。其の人と為りや、剛毅武勇。膂力人に絶す。跑ること飛鳥の如く。人皆之れを称して飛鳥と曰ふ。後父の業を襲ひ、立ちて郡主と為り、専ら西銘並びに於和手・片手・伊古武・幾也計等の邑を理む（共計5邑なり）。（尚敬王13年条 1725年）（____筆者）

『雍正旧記』には「西銘間切之主こぜさかりの子が真徳金（飛鳥爺）」となっている。『球陽』では、「西銘郡主古世佐嘉利に1男有り。乳名を真徳兼と曰ふ。」である。「西銘間切之主こぜさかり」と「西銘郡主古世佐嘉利」は同一人物で、真徳金の父親となっている。母親が誰かは明らかではないが、この古文書は、『宮古史伝』を著した慶世村に強い印象を与えたのではなかろうか。もちろん慶世村が『宮古島記事仕次』を何度も読み解いたうえで、飛鳥爺の出自をまとめたと思う。

『宮古島記事仕次』が1748年に編さんされ、それより20年前の1727年に『雍正旧記』はまとめられている。慶世村は古い文献にこだわり、『雍正旧記』を無視できなかったかも知れない。

『雍正旧記』と『球陽』をみると、西銘間切之主と西銘郡主は炭焼太良（嘉播親）の後継者である。この後継者は、炭焼太良（嘉播親）の次女目娥月の婿でなければ理に合わない。そのため慶世村は、『宮古史伝』で「居士佐加利は、西銘嘉播親の次女目娥月という女を娶って男子を生んだ。童名を真徳金といい後に飛鳥爺という。」とまとめたと考えられる。要するに慶世村は、飛鳥爺を炭焼太良の孫と解したのである。

ところが『宮古島記事仕次』に登場する「西銘の按司の一人娘・於母婦」と飛鳥爺が結婚にたどり着くためには、ある事態を大きく変化させねばならない。それは炭焼太良の次女目娥月が、箕隅邑に住む居士佐加利のもとへ嫁いだと解したことである。そのために『宮古史伝』では「西銘の按司の一人娘・於母婦」の母親の正体が、いまひとつ解らなくなった。

4. 『宮古史伝』の孫説は疑問

慶世村は『雍正旧記』と『球陽』に着目して、こぜさかりと古世佐嘉利は同一人物とみな

したと思われる。そのことで、『宮古史伝』の炭焼太良の孫説には、いくつかの矛盾が生じることになった。この矛盾は、当時の権力者であった炭焼太良（嘉播親、初代西銘按司）の立場に立ってみれば明らかである。

第一は、初代西銘按司が城内に1人だけ残った娘・目娥月を箕隅村に嫁に出すだろうか。このことは、下地（1983）もすでに指摘したことである。初代西銘按司は3男2女の子を設けたが、3名の男子は親不孝者で行方不明、長女・思目娥は根間の角嘉波良天太大氏に嫁ぎ、次女目娥月が箕隅村に嫁ぐと、初代西銘按司（嘉播親）の後継者はいないことになる。老年の初代西銘按司は目が不自由となり、3名の息子によって北の海でおぼれ死にされる直前、フカ（鮫）に助けられた人である。

西銘城を存続するためには、どうしても跡継ぎが必要だったと考える。城内に1人残った次女・目娥月に婿を迎えることは、西銘按司にとって大事な課題だったはずだ。したがって、炭焼太良（嘉播親）が次女・目娥月を箕隅村に嫁がすことは不自然だと考える。（目娥津喜と目娥月は同一人物であるので、以下目娥月に統一した）

第二は、飛鳥爺が次女目娥月の子と解すると、飛鳥爺の嫁になる於母婦との関係が不自然となる。『宮古史伝』には、於母婦の父を「西銘の按司で西銘城主」と明示し、子どもは男子に恵まれず一人娘だけだと述べている。初代西銘按司は3男2女の親であるから、於母婦の父は、二代目西銘按司と考えられる。二代目西銘按司になるためには、次女・目娥月の入り婿でなければならない。飛鳥爺も於母婦も目娥月の子であるはずがない。そのため『宮古史伝』は、於母婦の父親を西銘の城主、二代目西銘按司とみなしながら、その妻を明らかにせず、矛盾をはらんだものになっている。

目娥月の息子飛鳥爺と西銘の按司の一人娘於母婦との結婚は不自然であるが、2人を縁結びした西銘村の神女の「アヤゴを童にひろめ、真徳金を西銘城に招き寄せる行為」も不自然である。司の神託の話は、目娥月の存在を完全に無視した形で成り立っているからである。目娥月が飛鳥爺の生母であれば、アヤゴの歌詞「西銘主がよかりヤ按司の たウキヤ子於母婦や ぶなりヤ子あばらがや・・・」を神のお告げと受け止めて、飛鳥爺を西銘城下に様子うかがいに行かすはずがない。

第三は、於母婦の父西銘按司について『宮古史伝』は、次のように語る。

「その頃、西銘按司は西銘邑・上手邑・伊郡村、喜屋慶邑・片手邑を領して覇を称え、勢は盛んなものであった。この人に1人娘があつて名を於母婦といった。」

於母婦の父・西銘の按司が5カ村をつくり勢い盛んであったと『宮古史伝』は述べているが、時代的にみて前後関係が矛盾している。飛鳥爺が三代目西銘按司となってから5カ村をつくったのであり、二代目西銘按司の時代ではない。『宮古島記事仕次』は「入婿として西

銘のぬしとなる。是より威風遠近に振ひ、いよく名高くなりけり」と述べている。また『宮古史伝』でも「真徳金は、按司の死後、西銘城主となり飛鳥爺と名乗り武威大いに張り、隣城の諸將の恐れる所となった」と語っている。手狭な西銘城から広い西銘飛鳥城を築城して移り住んだのは飛鳥爺である。西隣の石原城主が飛鳥爺を恐れたのは、飛鳥爺の勢力拡大で自らの領地を乗っ取られることをあやぶんだからである。これらのことから、5ヵ村を治めるようになったのは、三代目西銘按司・飛鳥爺になってからだと解すべきある。

慶世村の『宮古史伝』が、飛鳥爺の出自を炭焼太良の次女目娥月の息子とみなした理由は、先にのべたように、こぜさかりと古世佐嘉利は同一人物と解したことによるもので、『雍正旧記』という古い文献を深読みした結果であると思う。そのため飛鳥爺の生母を目娥月とし、炭焼太良（嘉播親）の孫息子とみなしたのである。これが延長されて、初代西銘按司と後継者二代目西銘按司の関係が、曖昧にされたように考える。

以上の3つの矛盾点からして、『宮古史伝』のいう飛鳥爺を炭焼太良の孫とする説は、見直ししなければならない。『宮古島記事仕次』に述べられていることが、明らかに整合性があり合理的である。そして、『宮古島記事仕次』による炭焼太良の系統図は、忠導氏家譜とぴたりと一致していることから、信憑性が高いといわなければならない（注1）。飛鳥爺の築城を西銘飛鳥城と称したのは、西銘三代目按司として飛鳥爺が家督を継いだからであろう。

飛鳥爺の功績は、「其の勇は虎の如く、其の早いこと飛鳥の如し」と言われるように武勇に優れ、足が速く弓の名人であるだけではない。広い領地を駆け廻っていたから、飛ぶ鳥の如くと崇められたのではなかろうか。つまり、俊足は表面的な形であり、本当の内容は別のところにあると思う。それは、炭焼太良（嘉播親・初代西銘按司）から受け継いだ鍛冶の技術を生かし、農具をつくって百姓に分け与え、5ヵ村をつくり、広い領地を飛び廻って治めていた、このことに対する村人の尊敬のこころが、飛鳥爺という愛称で言い伝えられたとも考えられる。爺は男の老人のことである。白川浜の決闘で飛鳥爺は謀殺されたが、その時は、高齢にしてウキミヅラと対決したのではなかろうか。

（注1） 忠導氏系圖家譜正統（原）

「○○元祖仲宗根豊親見玄雅之高祖目黒盛豊親見親者日根間大按司の息男根間角嘉良天大の大氏之一子也母者西銘之主嘉播親之長女思免娥也○○」

5. 飛鳥爺生い立ちの見直し

市町村合併後、2012年に発行された『宮古島市史』第一巻通史編みやこの歴史の「村々の主長」には、『宮古島記事仕次』を忠実に受け継いだ記述が、次のように記されている。

西銘村に炭焼太良という人がいた。後に西銘の主長となる嘉播親で、西銘城を拠

点とする。野崎村長井の里の真氏と結ばれることで富貴の身になったという。嘉播の親には、親不孝な3人の息子と親孝行な2人の娘がいる。長女は思免嘉、二女は目娥月という。嘉播の親は西銘こぜさかり（後の西銘按司）を二女目娥月の婿に迎える。生まれたのが一人娘の於母婦で「ひとたび笑めば傾国のいろあり」といわれた。

保里村には保里天太と称される主長が保里城を拠点にしていた。2人の息子がおり、長男は保古利屋盛、次男は居士佐加利といった。家督相続争いに敗れた居士佐加利は城辺の箕の隅村に落ちのび、主長となる。「その勇猛虎のごとく、その健やかなる事飛鳥のごとし」と称された飛鳥爺（童名真徳金）の父である。

飛鳥爺の勇猛さに惚れ込んだ西銘按司は婿に迎えることを企む。按司の意を受けた神女はあやごをつくり子どもらに歌わせる。計画は功を奏し、飛鳥爺は於母婦と結ばれ西銘村の主長となり領地を拡大する。おわて村、伊こむ村、きやけ村、片手村などである。

石原村の主長は思千代按司といって石原城を拠点にしていた。飛鳥爺の威勢に不安を抱いた按司は東仲宗根村白川場の起目翦殿を刺客に雇った。その報酬は屋籠牛5匹である。弓にかけては「無双の武芸者」といわれる2人が白川浜で勝負することになった。50歩離れたところで背丈ばかりの穴を掘り首だけ出して髻にさした1寸ばかりの目印を射当てる弓の勝負である。飛鳥爺は見事に射通す。企んだ起目翦殿は半分ほど掘った穴から立ち上がり、飛鳥爺の両眼を射通す。その反射で飛び出した飛鳥爺の胸にもう1矢射通す。8、9町（870～980m）ばかりの砂浜に足跡を3つ残して飛鳥爺は飛び帰ったという。（下地和宏）

宮古島市総合博物館第一展示室の「飛鳥爺に関する家系図」は、1989年の開館当時から『宮古史伝』説（図2）が展示されてきた。この家系図には、別の説もあるという但し書きが添えてあった。『宮古島市史』の編さん委員長・仲宗根將二氏が「市史刊行に寄せて」述べているように、『宮古島市史』は現段階における宮古研究の最高水準を示した文献である。その原稿は、市史編さん委員会で議論・検討のうえ、担当者によってまとめられたものである。この『宮古島市史』刊行後2016年4月、宮古島市総合博物館は飛鳥爺の家系図について、『宮古史伝』説（図2）から『宮古島記事仕次』に基づく家系図（図1）に書き替えた。

6. 飛鳥爺の功績、領土5ヵ村建設

飛鳥爺が領土とした村について『宮古島記事仕次』は「西銘間切ハ、西銘村・おわて村・伊こむ村・きやけ村あり」と記している。『宮古史伝』は「西銘邑・上手邑・伊郡邑、喜屋

慶邑・片手邑を領して」と記録。『球陽』は「西銘並びに於和手・片手・伊古武・幾也計の邑を理む（共計5邑なり）」と記している。西銘村以外は表記がまちまちである。たとえば『宮古島記事仕次』のおわて村は、上手邑（宮古史伝）、於和手邑（球陽）となっている。伊こむ村は、伊郡邑（宮古史伝）、伊古武邑（球陽）と表記されている。『宮古島記事仕次』には、かたて村が欠けているが、おわて村に含めたからではなかろうか。

「西銘間切」の各村の位置について、稲村（1972）は「東南遙か長間部落に至るまでその（飛鳥爺の）領内であった」と述べているので、その村々の位置を検討してみた（長濱 2015 を若干訂正加筆し掲載）。

（1）西銘村

ニシ（北）ンミ（嶺）といえ、広く北海岸を指す場合もある。しかし、当時は「西銘間切」の西隣には石原城があり、東隣には高腰城があった。したがって、現在の西銘御嶽周辺が西銘村ではなかろうか。西銘城跡は図3のように石垣に囲まれた痕跡があり、陶磁器等の遺物も見つかっている。また、周辺には牧場跡ではないかとみられるサガーニ遺跡もある。旧城の跡や牧場の伝承等とあわせて、サガイガー、カナギガー、ダーシガーなど豊富な湧水があったことは、西銘村の存在をうかがう大事な決め手と考える。当時の西銘村を現在の小字でとらえると、平良字東仲宗根添小字サガーニと小字北増原あたりとなる。

（2）おわて村とかたて村

「おわて」と「かたて」という言葉の意味を知るためには、「西銘間切」の村々が現在の飛鳥御嶽を中心にして東西南北に広がっていた、このことを前提にする必要がある。まず「かたて」から検討してみたい。長間村の村立に関する「宮古島往復文書」（『多良間村史』4巻 1993）には、「山川之儀柚山土手内ニて御座候」とある。土手とは、土をを小高く積み上げた堤のことである。どうやら柚山土手内が問題を解く鍵になりそうである。「て」を土手と考えれば山川方面が「かたて村」ではなかろうか。飛鳥城の西側には、親元の西銘村があり、東側には山川、隅原一帯の「かたて村」で、ここには山川ウプカーという豊富な湧水がある。「おわて村」は「上の土手、上手、おわて」と考えられるので、飛鳥城正門の前方一帯である。現在の小字でみれば南増原と瓦原あたりである。ここにはシューガカー、ザウカニカー、ナカヤカー、プースカーなどの豊富な湧水がある。

（3）いこむ村

飛鳥御嶽から南の方向に、「いこむ村」の名残と考えられる地名がある。イクンバリである。元宮原小学校の前方あたり、宮積との中間地点で、ここにはブンミヤ屋敷跡もある。その東隣りには、古い屋敷跡も確認できる。

この地域を、更竹病院の高いところから眺めると、土底山と里山に囲まれたところである。

里山が囲む村、「囲む村」と書いていこむ村と読むことができる。このいこむ村は、長い間廃村に追い込まれて、明治の中頃に部落が再建された時、古層の村「いこむ村」の村が原に変化し、イコムハラ＝イクンバリとしてよみがえったと考えられる。命の水はスナバタ（スナ端）を流れる小川から、いくらでも汲み取ることができる。また、ツツプラ嶺の湧水も利用できる。現在の小字からみれば、宮積とムテヤあたりである。

（４）きやけ村

きやけ村が、旧記には「喜屋慶村」と表記されている。喜屋慶はキヤギ木のことでイヌマキという高級材である。西城中学校の裏山をキヤギ嶺と称し、北側の集落をキヤギと呼んでいる。喜屋慶地方とは、キヤギの里から忠導氏友利の主を祀った長間御嶽の周辺までを指していたと考えられる。現在の地積図では、大字長間小字長間と小字前野底である。

飛鳥爺はかたて村とみられる山川一帯から、はるか東方、現在の西城中学校付近までを、領地に使っていたことになる。これだけ広い領地を飛び回る領主を、当時の人々は飛鳥爺と称したのではないかと考える。

7. 飛鳥爺亡き後の「西銘間切」

飛鳥爺は、石原城主が雇った刺客ウキミゾラの謀略によって命を落とした。その後の西銘村はどうなったのだろうか。『宮古島記事仕次』によれば、白川浜の決闘の後、間もなくして石原城主とウキミゾラは、飛鳥爺の従弟・糸数大按司によって討ち滅ぼされた。

按司たちの領土をめぐる争いの中で、見落とせない記録がある。大野山林内、現在の市営植物園の北側の畑についてである。この土地を初めて開墾したのは、炭焼太良（嘉播親）の長女ウモイメガとその夫根間の角かわら天太大氏である。この土地は「いもひげもり」と呼ばれ、肥沃で優良地であった。根間の天太大氏は、息子の目黒盛が大きくなったら、この土地を譲る予定であった。飛鳥爺の従弟糸数大按司と話し合い、息子が大きくなったら返すことを条件に、この優良地を糸数大按司に預けた。

目黒盛は大きくなってから、川満村の伯母からその話を聞き、親の土地を返してほしいと糸数大按司に申し入れる。ところが、肥沃な畑であったことから、なかなか返してくれない。あげくの果ては、武勇にすぐれた7兄弟と密談をして、目黒盛と7兄弟との決闘を企てた。こうして目黒盛と7兄弟は、稲葉嶺（市営植物園の嶺）で決闘することになった。この争いで目黒盛は勝利した。親の遺産「いもひげもり」という肥沃な畑は目黒盛のものになった。

大野山林内の肥沃な畑「いもひげもり」の持ち主は、炭焼太良の長女とその夫・根間の天太大氏から糸数大按司、そして目黒盛と受け継がれることになる。飛鳥爺が亡くなって、間もなくして石原城主も滅ぼされたことから、大野山林一帯は炭焼太良の子孫の手によって支

配されたことになる。「いもひげもり」という肥沃地の周辺には、畑を耕作する百姓たちの住む集落がつくられていたであろう。言い換えれば飛鳥爺亡き後、西銘村は一時は滅亡したが、まもなくして再建されたと解釈すべきではないだろうか。

目黒盛から数えて5代目の子孫・仲宗根豊見親は、アカハチ征討の功績で尚真王から恩賜田として長間田を賜ったとされている。その証に「木刻拝領地之図」（宮古島市総合博物館所蔵）が残されている。稲村は尚真王から新しく賜ったものと解釈するよりも、これまで同家が私有田として所有してものを中山王府から改めて認許してもらったと解釈するのが正しいようだと述べている。いずれにしても、仲宗根豊親見時代に長間田を耕作していたことが史実であれば、豊親見の配下の者たちが、長間田を管理していたことになる。この一帯は飛鳥爺時代の「西銘間切」の領域であり、山川、隅原あたりに長間田を耕作する百姓が住んでいたと考えられる。つまり、飛鳥爺亡き後、西銘村は廃村が続いたのではない。炭焼太良の子孫が大野山林のいもひげもりという畑を管理し、仲宗根豊親見時代には長間田を耕作していたことから、西銘村は復活していたと解すべきだと考える。

ところが、薩摩の琉球侵攻後、生保年間（1644～47）に作成された「宮古島絵図」には、西銘村はしるされていない。復活していた西銘村は、再び廃村になったのである。旧記には、宮古在番が王府の許可を得て、1725年に飛鳥旧城の下に長間村を村立てしたとなっている。最初に大神から72名を山川の地に移転させたが、成功しなかった。それで1731年久松、狩俣、東川根、池間から200名を屋敷原に移住させ、村番所も設置し、与人や目差の役人も配置したという（稲村1972）。

しかし、湿地帯が要因となり熱病にかかるものが多く、住む人も減少し村立ては厳しかったようだ。それで1814年長間村を喜屋慶地方に移し、ようやく村立てが実現したのである。長間村立てを困難にしたのは、熱病としておそれられたマラリアによるものである。このマラリア感染による長間村立ての困難さは、飛鳥御嶽の前方や西側、つまり現在の宮原（旧山北）方面の村立ても困難だったことを示唆する。しかも、旧山北地域はマラリアによって長期にわたり荒廃が続いた。旧山北に人が住むようになったのは、明治に入る5年前の文久2（1862）年である（注2）。東仲宗根添村として独立したのは、土地整理のあった明治35年である。旧山北の発展はマラリアによって、明治、大正、昭和初期まで妨げられた。（旧山北のマラリア撲滅への道のりは、長濱2015「山北の集落と御嶽」で取り上げた）。

（注2）1862年野原村が東仲宗根村最寄土底を開拓（向えい氏家譜）『平良市史』
1862年友利村が東仲宗根村最寄佐和地を開拓（白川氏家譜）『平良市史』

8. 飛鳥御嶽の始まり

飛鳥爺の旧城が、祭祀場として崇められたのは、いつ頃だろうか。いくつかの旧記や文献に記録が残されている。具体的にみてみよう。

(1) 『雍正旧記』

一、西銘飛鳥城一 右由来は・・・「飛鳥が亡くなり、西銘間切是より漸々と追い散らかされ、村絶え為相成り由候。右村敷所は、今野島に成り申し候。彼島最寄りの人あらざれば往還の時、俄に病死仕り候もの数多く有之。定めて此は飛鳥亡霊のたたりにて候哉。彼旧城へ香花を祭り上げ候此は飛鳥亡霊のたたりにて候哉。彼旧城へ香花を祭り上げ候間、直り候に付、人々聞き付け年増み崇敬仕り来たり。中古迄は祭り申し候」。

(2) 『宮古島旧記並史歌集解』（稲村解説）

飛鳥爺が白川浜の決闘で、ウキミゾラに不意討ちされ、その後のことが述べられている。「これからの後西銘村は離散し、続いていさら原も衰えて、この地方は一面の野島となったけれど付近を通る人々が俄に病気にかかり又死亡する者が相次いで起こったので、これは飛鳥爺亡霊魂のたたりであろうということになり、彼の旧城の中に御嶽をたて祭事を取り行うようになったので、そのたたりもなくなり年年に崇敬されるようになった」（稲村 1962）

(3) 『球陽』

「西銘邑だんだん衰退し、ついに荒野となる。近世に至り、飛鳥の怨恨は猶遺在するが如くして、他の田圃を耕す人、しばしば疾病に染みて、斃死すること有り。この故に邑人、この地を往来するに、必ず祭品を備へ、飛鳥城を拝謁してもって弔祭を為す。この年に至り、その旧城の下に王命を請乞して長間邑を建設す」（尚敬王 13 年条 1725 年）。

(4) 『宮古史伝』

〔飛鳥〕爺の死後之を祀り飛鳥御嶽と称し、東仲宗根添に現存す。領内の邑々は爺の死後、隣城の圧迫に堪えかねて離散したが、皇紀 2385（1725）年、附近に今の長間邑を建てた。

以上 4 つの文献から、いつ、誰が、どうしたかを整理してみると、次のようになる。

旧記・文献の比較

	いつ	誰が	どうしたか
雍正旧記	飛鳥亡くなり廃村後	畑が身近でない人	往還の時、俄に病死
稲村解説	飛鳥亡くなり廃村後	付近を通る人々	俄に病気にかかり又死亡
球陽	近世に至り	他の田圃を耕す人	疾病に染みて、斃死する
宮古史伝	飛鳥爺の死後	領内の邑々	離散（廃村）

注：「稲村解説」は『宮古島旧記並史歌集解』

4つの文献とも若干の違いはあるものの、飛鳥爺の旧城の付近を往来する人に、災いが起きていることが分かる。

次の問題は、飛鳥爺のうらみ魂を鎮めため、何をしたかである。4つの文献を比べてみた。
旧記・文献の比較

雍正旧記	此は飛鳥亡霊のたたりにて候哉。彼旧城へ香花を祭り上げ候
稲村解説	飛鳥爺亡霊魂のたたりであろうということになり、彼の旧城の中に御嶽をたて祭事をとり行う
球陽	邑人、この地を往来するに、必ず祭品を備へ、飛鳥城を拝謁してもって弔祭を為す。
宮古史伝	〔飛鳥〕爺の死後之を祀り飛鳥御嶽と称した

注：「稲村解説」は『宮古島旧記並史歌集解』

以上のように、『雍正旧記』、『球陽』、慶世村『宮古史伝』、稲村『宮古島旧記並史歌集解』の中から飛鳥御嶽の始まり・時期を探ってみた。稲村と慶世村は「旧城の中に御嶽をたて祭事をとり行う」、「〔飛鳥〕爺の死後之を祀り飛鳥御嶽と称した」と明確である。『雍正旧記』は「旧城へ香花を祭り上げ候」、『球陽』は「祭品を備へ、飛鳥城を拝謁してもって弔祭を為す」と祭祀の記録を残している。その時期は「廃村後」と不明であるが、『球陽』では「近世」となっており、その文脈からは1725年頃ではないかと考えられる。

『雍正旧記』（1727）には、「中古迄は祭り申し候」と記されおり、1727年までに祭は途絶えたように受けとられる。しかし、飛鳥爺に詳しい友利の主が長間村立に係わっていたことから、長間村の人たちによって、飛鳥御嶽は崇められてきたと考えられる。明治35年の土地台帳によれば、飛鳥御嶽の地目は拝所、地番は平良字東仲宗根添小字南増原2532番地、面積は4町8反221歩、所有者は添村となっている。

9. 飛鳥御嶽の年間祭祀

飛鳥御嶽は、シューガヤーウタキとも呼ばれている。祭神名は、飛鳥爺または真徳金である。飛鳥御嶽の年間祭祀は、①タテバン、②麦プース、③先アープース、④後アープース、⑤ユースタミ・シツ、⑥ユークイ願い、⑦ヤーキダミ、⑧トスノバンの計8回である。麦プースの祭祀に、シートダスキとプースダミを併せて祈願しているの、それを加えると、年間祭祀は10回となる。祭祀集団は南増原、山川、隅原集落の人びとが中心である。集落出身の人やこの御嶽と縁のある人も参拝している。神役はウサギサスと幹事、そして2年交替のサズである。ウサギサスが高齢化し神役の務めが困難になっているが、後継者はいない。それ

で輪番制のサズが、ウサギサスの代わりを務めている。祭祀はアープース°のように集落の各世帯から1人以上が参拝する祭と、タテバン、トスノバンのように神役としての代表が参拝する祭がある。線香の取り方には、決まり事がある。宮古線香の半平（平香の半分、3本）を1単位として数えている。供物も昔から決められた品をお供えしている。

飛鳥御嶽の祭祀について筆者は、飛鳥御嶽担当の幹事やサズの許可を受けて、2011年3月より2014年7月まで4年余にわたり実地調査を行った。また、関係者の聞き取り調査も、くり返し行った。記載の悉皆調査結果は、南増原が行っている祭祀である。

飛鳥御嶽の祭祀 1

1	祭名	タテバン
2	祭の目的	御嶽の神様に、本年度の祭祀行事を告げる
3	祭の時期	旧暦2月 みずのととり 新暦2011. 3. 13 旧暦2/21 (悉皆調査)
4	祭神	飛鳥爺(本殿)、水の主、ニシメ主、リウグ主、ユウノ主、アジノ主
5	祭のレベル	南増原(サト・里)
6	祭の参加者	ウサギサスと幹事、2年目のサズ、1年目のサズ、
7	祭の過程	<p>①サスの事前準備 宮古線香、酒、塩、花米、洗米、豆腐等の供物と参拝者の弁当</p> <p>②当日は、朝9時に飛鳥御嶽集合。参拝者6名分の「どず香」を取り「案内香」として本殿元イビに焚く。線香は1人当たり半平(1カガニの半分)。案内香を焚くときは、「キュウヤ タテバン ヤーバ」と神に告げる。</p> <p>③ウサギ香は、12方の分として12本(12ヶ月、12支)、屋敷4方の分4本、門の分2本、合計18本(1本とは1カガニの半分)。これに南増原の29戸数分(1戸1本×29)、合計では18+29=47本を紐で一束に結ぶ。線香を焚いて本殿親イビに供える。</p> <p>④祭壇の盃に酒注ぎ、イビの前に供物を供え、参拝者一同祈願する。</p> <p>⑤本殿東隣の西銘主等4遙拝所には、7本の線香と供物を供え祈願。</p> <p>⑥本殿西隣の水の主には、7本のミズ香(線香を燃やさない)と供物を供え祈願する。竜宮の主も同様である。</p>
8	供物の種類	塩、酒、花米、洗米、小魚、豆腐、ジンゴース、タバコ
9	その他	○ 宮古線香は6本が連結している。これをヒトヒラとか1カガニと数

		<p>えている。ヒト平の半分を半平といい3本香となる。その半平香（3本）は、天の神、地の神、海の神への捧げ分である。</p> <p>○本殿の東側の遙拝所には、ニシメ主、リウグ主、ユウノ主、アジノ主のイビが備えてある。</p>
--	--	--

飛鳥御嶽の祭祀 2

1	祭名	麦プース°
2	祭の目的	<p>麦と農作物の豊年祈願祭</p> <p>生徒ダスキとプーキダミを並行して祈願する</p>
3	祭の時期	旧暦3月 きのとトリ 新暦2011. 3. 25 旧暦3/4 (悉皆調査)
4	祭神	飛鳥爺（本殿）、水の主、ニシメ主、リウグ主、ユウノ主、アジノ主
5	祭のレベル	南増原（サト・里）
6	祭の参加者	ウサギサスと幹事、2年目のサズ、1年目のサズ、
7	祭の過程	<p>①サスの事前準備</p> <p>線香、酒、塩、花米、洗米、豆腐等の供物と参拝者の弁当</p> <p>②当日は、朝9時に飛鳥御嶽集合。参拝者6名分、6本の線香で案内香を焚き、神に麦プース°であることを告げる。</p> <p>③ウサギ香は、12方の分として12本（12ヶ月、12支）、屋敷4方の分4本、門の分2本、これに今回は7ズトウの分7本を加え25本とする。（ズトウとは地頭のこと）。（1本とは1カガニの半分）。これに南増原の29戸数分（1戸1本×29）、合計では25+29=54本を紐で一束に結ぶ。線香を焚いて親イビに供える。</p> <p>④祭壇の盃に酒を注ぎ、イビの前に供物を供え、参拝者一同祈願する。</p> <p>⑤本殿隣の西銘主等4遙拝所には、7本の線香と供物を供え祈願する。</p> <p>⑥本殿西隣の水の主には、7本のミズ香（線香を燃やさない）と供物を供え祈願する。</p> <p>⑦次に生徒ダスキを祈願する。</p> <p>線香を29戸分の29本束ね、親イビに焚く。西銘主など遙拝所の4イビには、7本の線香と供物を供える。水の主と竜宮の神には燃やさないミズ香を7本供える。</p> <p>⑧その次に、プーズダミを祈願する。線香の取り方は生徒ダスキ同様。</p>

8	供物の種類	線香、塩、酒、花米、洗米、小魚、ミキ、豆腐、麦（煎じる）、野菜・カンピョウ、ジンゴース、タバコ
9	その他	ズトウは地頭である。地頭とは按司時代に田畑を開発し、その領主になった人のこと。飛鳥爺は5ヵ村という広い土地を領土にしていた領主である。地頭とは飛鳥爺にうってつけの名称である。

飛鳥御嶽の祭祀3

1	祭名	先アープース°
2	祭の目的	粟と農作物の豊年祈願祭
3	祭の時期	旧暦4月 きのとトリ 新暦2014. 5.14 旧暦4/16 (悉皆調査)
4	祭神	飛鳥爺（本殿）、水の主、ニシメ主、リウグ主、ユウノ主、アジノ主
5	祭のレベル	南増原（サト・里） 山川、隅原集落も同日独自に行う
6	祭の参加者	ウサギサスと幹事、サズ、各戸一人、サトの出身や関係者など55名
7	祭の過程	<p>①サスの事前準備</p> <p>玄米粉15kg、グラニュー糖1kg、麦麴、酒1升、ビール1ケース、お茶2ケース、お菓子、野菜詰合せ55パック、おにぎり55パック、刺身55パック、消耗品（コップ、割り箸、皿、折り箱、ちり袋など）。</p> <p>祭祀前日、サズの家にはサトの女性たちが集まりミキをつくる。</p> <p>②当日、ウサギサスと幹事、サズなど6名の神役は朝9時までに飛鳥御嶽集合。正門左右に案内線香を2本ずつ焚き、神にアープース°であることを告げる。参拝者6名分、6本の線香で案内香を焚き、神にアープース°であることを告げる。</p> <p>③本殿親イビに6名分6本の案内香を焚き、アープース°であることを告げる。</p> <p>④ウサギ香は、12方の分として12本（12ヶ月、12支）、屋敷4方の分4本、門の分2本、7ズトウの分7本を加え25本とする。（ズトウとは地頭のこと）。（1本とは1カガニの半分）。これに南増原の29戸数分（1戸1本×29）、合計では25+29=54本を紐で一束に結ぶ。線香を焚いて親イビに供える。</p> <p>⑤祭壇の盃に酒を注ぎ、イビの前に供物を供え、参拝者一同祈願する。</p> <p>⑥本殿より西側の水の主には、7本のミズ香と供物を供え祈願する。</p>

		<p>⑦本殿より東側の西銘主等遙拝所の4イビには、7本の線香と供物を供える。水の主と竜宮の神には7本のミズ香と供物を供え祈願する。</p> <p>⑧その後、サトの参拝者がヤーキ分の線香と供物を捧げ祈願する。サト以外の方々も来訪し、線香と供物を捧げ祈願する。</p> <p>⑨飛鳥御嶽参拝後、テントを張った増原ザー（広場）に集まり、御神酒を飲み、アンタリジューシー（おにぎり）、野菜、刺身をいただきながら豊年祭を祝う。</p> <p>⑩昔はサラピョースアークを歌い、御神酒を回しのみし、踊って豊年祭を祝った。今は皿ピャースアークを歌い継ぐ人がいなくなった。</p> <p>⑪夕方、親イビにマンサン香（12+4+2+29=47本）を焚き、ヤーキ算を奉納する。ヤーキ算とは、各世帯の人数分のワラを数えて取り、世帯毎に連結したもので、サトの世帯数と人口が知ることが出来戸籍簿のようなもの、ワラ（藁）をもって計算するのでワラ算ともいう。最近では稲や麦を栽培しないため、ワラがない。そのためカヤ（ススキ）の葉をワラ代わりに使っている。（写真）</p> <p>ヤーキ算の奉納には、家内安全、子孫繁栄の願いが込められている。この1年以内に、赤ちゃんが誕生した家はダキマスを捧げる。</p>
8	供物の種類	線香、塩、酒、花米、洗米、おミキ、小魚、豆腐、野菜
9	その他	皿ピャース儀礼については、00頁に掲載

飛鳥御嶽の祭祀4

1	祭名	後アープース°
2	祭の目的	粟と農作物の豊年祈願祭
3	祭の時期	つちのえネズミ 新暦2014. 5. 14 旧暦4/16 （悉皆調査）
4	祭神	飛鳥爺（本殿）、水の主、ニシメ主、リウグ主、ユウノ主、アジノ主
5	祭のレベル	南増原（サト・里） 山川、隅原集落も同日独自に行う
6	祭の参加者	ウサギサスと幹事、サズ、各戸一人、サトの出身や関係者など40名
7	祭の過程	<p>①サスの事前準備</p> <p>線香1箱、塩1袋、半紙、酒、花米、洗米等の供物、ビール1ケース、お茶2ケース、野菜盛合せ40パック、おにぎり40パック、刺身40パック、消耗品など（コップ、割り箸 皿、折り箱、氷、チリ袋）</p>

		<p>玄米粉15kg、グラニュー糖 1 kg、麦麴、酒一升、ビール 1 ケース、お前日にサトの女性たちがサズの家でおミキをつくる。</p> <p>②当日、ウサギサスと幹事、サズなど 6 名の神役は朝 9 時までに飛鳥御嶽集合。正門左右に案内線香を 2 本つつ焚き、神にアープース°であることを告げる。参拝者 6 名分、6 本の線香で案内香を焚き、神にアープース°であることを告げる。</p> <p>③本殿親イビに 6 名分 6 本の案内香を焚き、アープース°であることを告げる。</p> <p>④ウサギ香は、12 方の分として 12 本（12 ヶ月、12 支）、屋敷 4 方の分 4 本、門の分 2 本、7 ズトウの分 7 本を加え 25 本とする。（ズトウとは地頭のこと）。（1 本とは 1 カガニの半分）。これに南増原の 29 戸数分（1 戸 1 本×29）、合計では 25+29=54 本を紐で一束に結ぶ。線香を焚いて親イビに供える。</p> <p>⑤祭壇の盃に酒を注ぎ、イビの前に供物を供え、参拝者一同祈願する。</p> <p>⑥本殿西側の水の主には、7 本のミズ香と供物を供え祈願する。</p> <p>⑦本殿東側の西銘主等 4 イビには、7 本の線香と供物を供える。 竜宮の神には、ミズ香を供え祈願する。</p> <p>⑧その後、サトの参拝者がヤーキ分の線香と供物を捧げ祈願する。 サト以外の方々も来訪し、線香と供物を捧げ祈願する。</p> <p>⑨飛鳥御嶽参拝後、テントを張った増原ザー（広場）に集まり、御神酒を飲み、アンタリジューシー（おにぎり）、野菜、刺身をいただきながら豊年祭を祝う。</p>
8	供物の種類	線香、塩、酒、花米、洗米、おミキ、小魚、豆腐、野菜、お菓子

飛鳥御嶽の祭祀 5

1	祭名	ユースタミ・シツ
2	祭の目的	サトの平安を祈願する。井戸の神に感謝し、健康を祈願する。
3	祭の時期	旧暦 5 月 きのえウマ 新暦 2011. 6. 8 旧暦 5/2 （悉皆調査）
4	祭神	飛鳥爺（本殿）、水の主、ニシメ主、リウグ主、ユウノ主、アジノ主
5	祭のレベル	南増原（サト・里）
6	祭の参加者	ウサギサスと幹事、サズなどサトの代表 6 名

7	祭の過程	<p>①サスの事前準備 宮古線香1箱、打ち紙（紙銭）5段、キビナ1袋、ミキ5本、菓子6個、もち（あんこなし）5個入り2パック、豆腐半丁、タバコ1箱、かんぴょう+トーフ4パック、白おにぎり4パック、弁当6名分、消耗品など。</p> <p>②当日、ウサギサスと幹事、サズなど6名の神役は朝9時までに飛鳥御嶽集合。本殿の神に参拝者6名分、6本の線香で案内香を焚き、神にユースタミ願いであることを告げる。</p> <p>③ウサギ香は、12方の分として12本（12ヶ月、12支）、屋敷4方の分4本、門の分2本、7ズトウの分7本を加え25本とする。（ズトウとは地頭のこと）。（1本とは1カガニの半分）。これに南増原の29戸数分（1戸1本×29）、合計では25+29=54本を紐で一束に結ぶ。線香を焚いて親イビに供える。</p> <p>④祭壇の盃に酒を注ぎ、イビの前に供物を供え、参拝者一同祈願する。</p> <p>⑤本殿西側の水の主には、7本のミズ香と供物を供え祈願する。</p> <p>⑥本殿東側の西銘主等遙拝所の4イビには、7本の線香と供物を供え祈願する。竜宮の神にはミズ香を捧げる。</p> <p>⑦打ち紙は飛鳥御嶽本殿に16枚、東側の遙拝所に3ヵ所には12枚を燃やして、神の世に「金」を送る。その後、シュガカーに行き、ミズ香と供物をそなえ命の水への感謝とサト人の健康を祈願する。</p> <p>⑧次にサトの十字路に出向き、車ダスキ、道路ダスキの線香と供物を供える。車両の故障防止と交通安全を祈願するものである。</p> <p>⑨次に生まれガー（井戸）の神に線香と供物を供え、命の水への感謝と家族の健康を祈願する。井戸への参拝は、各戸毎で行う。</p>
8	供物の種類	線香、塩、酒、花米、洗米、おミキ、小魚、豆腐、野菜

飛鳥御嶽の祭祀6

1	祭名	ユークイ願い
2	祭の目的	サトの人々の健康とサトの繁栄を祈願する。
3	祭の時期	旧暦8月 かのとり 新暦2011. 9. 3 旧暦8/6（悉皆調査）
4	祭神	飛鳥爺（本殿）、水の主、ニシメ主、リウグ主、ユウノ主、アジノ主

5	祭のレベル	南増原（サト・里）
6	祭の参加者	ウサギサスと幹事、サズなどサトの代表6名
7	祭の過程	<p>①サスの事前準備 宮古線香1箱、酒1本、小魚、豆腐半丁、カンピョウ詰合せ4パック、弁当とお茶6個、菓子6個</p> <p>②当日、ウサギサスと幹事、サズなど6名の神役は朝9時までに飛鳥御嶽集合。本殿の神に参拝者6名分、6本の線香で案内香を焚き、神にユークイ願いであることを告げる。</p> <p>③ウサギ香は、12方の分として12本（12ヶ月、12支）、屋敷4方の分4本、門の分2本、7ズトウの分7本を加え25本とする。（ズトウとは地頭のこと）。（1本とは1カガニの半分）。これに南増原の29戸数分（1戸1本×29）、合計では25+29=54本を紐で一束に結ぶ。線香を焚いて親イビに供える。</p> <p>④祭壇の盃に酒を注ぎ、イビの前に供物を供え、参拝者一同祈願する。</p> <p>⑤本殿西側の水の主には、7本のミズ香と供物を供え祈願する。</p> <p>⑥本殿東側の西銘主遙拝所4イビには、7本の線香と供物、ただし竜宮の神にはミズ香を供え祈願する。</p>
8	供物の種類	線香、塩、酒、花米、洗米、小魚、ジンゴース、野菜、おにぎり

飛鳥御嶽の祭祀7

1	祭名	ヤーキダミ
2	祭の目的	防火予防の祭祀、ウーハーともいう。
3	祭の時期	旧暦10月 きのとウシ 新暦2011.11.6 旧暦10/11（悉皆調査）
4	祭神	飛鳥翁（本殿）、水の主、ニシメ主、リウグ主、ユウノ主、アジノ主
5	祭のレベル	南増原（サト・里）
6	祭の参加者	ウサギサスと幹事、サズなどサトの代表6名
7	祭の過程	<p>①サスの事前準備 宮古線香1箱、酒1本、米4kg、小魚、大豆、豆腐半丁、折り詰めとお茶6個、菓子1袋</p> <p>②当日、ウサギサスと幹事、サズなど6名の神役は午後2時までに飛鳥御嶽集合。本殿の神に参拝者6名分、6本の線香で案内香を焚き、神</p>

		<p>にヤーキダミであることを告げる。</p> <p>③ウサギ香は、12方の分として12本（12ヶ月、12支）、屋敷4方の分4本、門の分2本、計18本とする。（1本とは1カガニの半分）。これに南増原の29戸数分（1戸1本×29）、合計では18+29=47本を紐で一束に結ぶ。線香を焚いて親イビに供える。</p> <p>④祭壇の盃に酒を注ぎ、イビの前に供物を供え、参拝者一同祈願する。</p> <p>⑤本殿西側の水の主には、7本のミズ香と供物を供え祈願する。</p> <p>⑥本殿東側の西銘主遙拝所4イビには、7本の線香と供物、竜宮の神にはミズ香を供え祈願する。</p>
8	供物の種類	線香、塩、酒、花米、洗米、小魚、ジンゴース、野菜、おにぎり

飛鳥御嶽の祭祀 8

1	祭名	トスノバン
2	祭の目的	今年の祭祀が終わることを告げ、この1年間の御加護に感謝する。
3	祭の時期	旧暦12月 みずのトリ 新暦2012. 1. 13 旧暦12/20 (悉皆調査)
4	祭神	飛鳥爺（本殿）、水の主、ニシメ主、リウグ主、ユウノ主、アジノ主
5	祭のレベル	南増原（サト・里）
6	祭の参加者	ウサギサスと幹事、サズなどサトの代表6名
7	祭の過程	<p>①サスの事前準備</p> <p>宮古線香1箱、酒1本、米4kg、小魚、大豆、豆腐半丁、折り詰めとお茶6個、菓子1袋</p> <p>②当日、ウサギサスと幹事、サズなど6名の神役は午前9時までに飛鳥御嶽集合。本殿の神に参拝者6名分、6本の線香で案内香を焚き、神にトスノバンであることを告げる。</p> <p>③ウサギ香は、12方の分として12本（12ヶ月、12支）、屋敷4方の分4本、門の分2本、計18本とする。（1本とは1カガニの半分）。これに南増原の29戸数分（1戸1本×29）、合計では18+29=47本を紐で一束に結ぶ。線香を焚いて親イビに供える。</p> <p>④祭壇の盃に酒を注ぎ、イビの前に供物を供え、参拝者一同祈願する。</p> <p>⑤本殿西側の水の主には、7本のミズ香と供物を供え祈願する。</p> <p>⑥本殿東側の西銘主等遙拝所の4イビには、7本の線香と供物、竜宮の</p>

		神にはミズ香を供え祈願する。
8	供物の種類	線香、塩、酒、花米、洗米、小魚、ジンゴース、野菜、おにぎり

10. 飛鳥御嶽 皿ピャーす儀礼の事例

長浜数子 1975「宮古歌謡ピャーシグイ論」『沖縄文化』第7巻より引用

隅原と山川は隣接していて、ひとつの祭祀集団を形成している。毎年旧5月の乙酉から戌の両日、飛鳥御嶽で粟プーい祭祀が行われ、その中で両日にわたって二度サラピャーす儀礼が行われる。

飛鳥御嶽は飛鳥主を祭神とする。平良市南増原と城辺町隅原・山川の共同御嶽で、近接諸部落の中取り（遙拝）御嶽の本御嶽としても広く信仰されている。この御嶽には2つの座（ピャーす座ともいう）があり、祈願の時は、この座に各村祭祀集団が集まることになっていてサラピャーす儀礼もこの座で行われる。

まず、サスと呼ばれる神女を中心に、豊穰と健康の感謝の報告と今後の祈願が行われる。その後、ピャーす座に男女集合して、サラピャーす儀礼にはいる。子の方から女性神役、男子神役高齢者の順で円座し同時にブンと呼ばれる膳には、なみなみと神酒を盛った2個のサラ（神酒を入れて飲む神器）と、ひとつかみの塩が準備される。

最初にく図Ⅲ>①の2人の前にブンが置かれ、サラヌヌスのブンの持ち運びをする給仕役の男が2人に対座する。頃合いをみて、サラヌヌスの先導で、手拍子を打ちながら次の詞章が唱謡される。サラヌヌスの後から同一節を円座の人々は反復唱和する。

（数字は曲のくり返し部分の区切りを示す。以下同様）

- | | | |
|---|-----------|--------|
| 1 | キューヌ ピューい | 今日の日取り |
| | カンヌ ピューい | 神の日取りを |
| | トゥラマエ | 取りなさって |
| 2 | ヤすきヌす | 屋敷主 |
| | トゥクルヌす | 所主を |
| | ニガマエ | 願いなさりて |
| 3 | ゾーヌカンマ | 門の神 |
| | スウディヌカン | 袖の神 |
| | ニガマエ | 願いなされて |
| 4 | ウカマガン | 御籠神 |

	ミいズウヌヌす	水の主
	ニガマエ	願いなされて
5	サスヌキヤートウ	サス<神役>たちと
	サズヌキヤートウ	さず<サスの下働き係>たちと
	ダンカシユー	相談して
6	アカダカヤ	頭数は
	ヤーキカズヤ	家数は
	ユママエ	読みなされて
7	カミナミヤ	甕並は
	つブナミヤ	壺並は
	サマヨテ	なされて
8	トゥびトゥリヤヤ	飛鳥主は
	マトウフガニシユーガ	真徳金主の (注3 マトウヌシユー)
	ウブプーい	大プーい
9	オモフンマ	於母婦母は (注4 ウムいミガ)
	ウヤんまヤ	母なる神は
	ニガマエ	願いなされて
10	ニヌパンま	ニヌパンマ
	んまティダヤ	んまティダ
	ニガマエ	願いなされて
11	ウヤキリヤガ	富貴者が
	クヌミウキ	企みおく
	ユヌザラ	同じ皿を
12	ンティムラシ	満ち盛らせて
	ワームラシ	上盛らせて
	ニガマバ	願いなさると
13	イツつきヌ	5月の
	トゥユつきぬヌ	豊月の
	ウブプーい	大プーい
14	ユーナウリヤガ	世直りゃが
15	ユーマシャリヤガ	世勝りゃが

そして、全員「トートゥヨー」と唱和した後で①の2人は皿を受け取る。受け取る
 とき「ウガマディヨー（拝むよ）トートゥガトートゥ」とか、「アランミヨーい、ト
 トゥガトートゥ」と言う。一口、二口必ず神酒を飲んで、飲み終わると「クガニウブ
 サローウガタンヨー（黄金の大皿を拝んだよ）トートゥガトートゥ」と言ってブン
 にサラを返す。すると給仕役のブンの係は、ブンを持ち上げてサラを受け取りながら
 「ノーティガンナピンキギサマンガヨー（どうしてももっと召しあがらないのか）ト
 トゥガトートゥ」と答える。この儀礼的応答を「キョーギン（狂言・冗談）」といい、
 円座の人々はこのキョーギンにしばらく笑い興じる。

（注3 原文はマトゥヌシューとなっているが、旧記では真徳金である・筆者）

（注4 原文はウムいミガとなっているが、旧記では於母婦である・筆者）

粟穂祭りの皿びゃースあーぐ（東仲宗根添 ンタスク）

長浜数子採集資料 外間・新里編『南東歌謡大成』宮古篇（1978）より引用

さらびゃースあーぐ〈男〉			粟穂祭りの女びゃーし		
1	きゅーぬ ぴゅーイ	今日の日取り	1	にーぬば	子の方角の
	くーがーにーぬびゅーイ	黄金の日取りを		んーまていだーや	母ティダを
	にーがーまーりゃー	願いなさるので		にがまーえー	願いなさるので
2	ぱーかーやーさーじ	計量佐司と		もーとーいー	本生い
	うーぷーざーシーとう	大佐司と		そいなうれー	添い直れ
	わーたーんーとうーり	話談をとって	2	とうーらぬばぬ	寅の方角の
3	とうーびーとうーりゃ	飛鳥主を		おーちよぬぬっさ	御帳の主を
	まーとうふがにしゅーや	真徳金主を		にがまーえー	願いなさるので
	にーがーまーりゃー	願いなさるので	3	んーまぬばぬ	午の方角の
4	やーきーゆーかーじ	家ごとに		おーぼよぬっさ	大世主を
	あーかーだーなかーよ	頭ごとに		にがまーえー	願いなさるので
	にーがーみーまーえー	願いなされて	4	さーいぬばぬ	申の方角の
5	なーんーかーそーじ	7日精進		さーんがぬっさ	算の主を
	よーゆーかーぬそーじ	8日の精進		にがまーえー	願いなさるので
	くーまーいとーり	籠をとって	5	いーんぬばぬ	戌の方角を
6	まーシーとうーりゃーし	枡取りをして		いーんがぬっさ	印の主を

チーがーとうーりゃーし	枅取りをして	にがまーえー	願いなさるので
うーさーみーりゃー	納めるので	6とうーふたぼうぬかん	1 2方の神
7きーんーみーとゆーり	斤目取り	じゅーにぼーや	1 2方を
あーやーみーとうーり	綾目取りをして	にがまーえー	願いなさるので
にーがーまーりゃー	願いなさるので	7ぶーんぬ まーや	盆の間は
8うーぶーゆーぬーシ	大世主	だーいぬ まーや	台の間は
うーぶーざーらーゆ	大皿を	やまだーなー	止まらずに
うーさーぎーりゃー	差し上げるので	〈音頭取り〉	
9ばーたーむーらーし	端盛らし	ゆましゃーりゃが	世勝りゃが
わーむーらーしーどう	上盛らせて	〈円座の女達〉	
うーさーぎーりゃー	差し上げるので	まさらし	勝らせ
10やーにーぬーゆーや	来年の世は	ゆましゃーりゃよ	世勝りゃよ
まーさーらーしーとう	勝らせと		
にーがーまーいー	願いなされて		
〈皿の主〉			
ゆーましゃーりゃーが	世勝りゃが		
〈円座の男達〉			
ゆーやなーおりゃーせ	世は直らせよ		

11. 飛鳥御嶽の遙拝所（中通イ御嶽）

飛鳥御嶽の祭神への遙拝所（中通イ御嶽）を、『平良市史』第9巻御嶽編から、つぶさに調べてみた。その結果、12地域30カ所の飛鳥御嶽の遙拝所（中通イ御嶽）を確認した。地域ごとには、次の通りである。

宮原地域8カ所、長間地域5カ所、添道4カ所、市街地西里3カ所、西仲宗根2カ所、下地地域2カ所、高野地域、細竹地域、野原越地域、東仲宗根 荷川取、城辺福里は各1カ所である。なぜ、これだけ多くの飛鳥御嶽祭神への遙拝所があるのだろうか。考えられる理由は2つある。1つは、飛鳥爺一門（西銘按司、目黒盛豊見親、仲宗根豊見親の血族集団が）が各地に移住し、遙拝所をつくった。2つめは、飛鳥御嶽がつくられた経緯に示されたように、飛鳥爺の怨恨を鎮めるため（マラリアの感染症を防ぐため）、飛鳥御嶽の遙拝所をつくった。30カ所もつくられた遙拝所は、そのいずれかであろう。

- 宮原地域（8カ所）、飛鳥御嶽や西銘御嶽が見通せる比較的高い場所にある。
- ①宮積・ウブ御嶽（高嶺御嶽）、②ムテヤ・サーズー御嶽、③スナ・サト御嶽、④サガーニ・ウブ御嶽、⑤北増原・飛鳥爺中通イ御嶽、⑥瓦原・タカ御嶽、⑦土底・ウブ御嶽、⑧更竹、ザラツキ御嶽
- 長間地域（5カ所）
- ①長南・ウブ御嶽、②長中・飛鳥御嶽、③山川・マラシ御嶽、④山田・サト御嶽、⑤屋敷原・天の主御嶽、
- 添道（4カ所）
- ①添道・前福元御嶽、②アダダキ元御嶽、③添道飛鳥御嶽、④中添道御嶽
- 市街地西里（3カ所）
- ①ミフツカン飛鳥主御嶽、②スムヤー御嶽、③下屋御嶽
- 西仲宗根（2カ所）
- ①フサティ御嶽、②ミーヌ御嶽
- 下地地域（2カ所）
- ①上地・里御嶽、②与那覇・ツキンヤー御嶽
- 高野地域（1カ所）
- ①高野御嶽
- 細竹地域（1カ所）
- ①ウブ御嶽
- 野原越（1カ所）
- ①ウブ御嶽
- 東仲宗根（1カ所）
- ①イザガ御嶽
- 荷川取（1カ所）
- ①パスタ御嶽
- 城辺地域（1カ所）
- ①福里・イラウビヤース御嶽

まとめ

- ①飛鳥爺の出自には2つの説がある。1つは『宮古島記事仕次』が記録した「炭焼太良の次女・目娥月と西銘こぜさかりの一人娘於母婦の入り婿が飛鳥爺」という説である。炭焼太良の立場からは、孫娘の婿と言うことになる。

2つ目の説は『宮古史伝』が記したもので、「炭焼太良の娘・目娥月が箕隅村の居士佐加利に嫁いでもうけた子が飛鳥爺」という説である。炭焼太良の立場からは、娘の子となるから孫と言うことになる。

②『宮古史伝』を著した慶世村恒任は、宮古研究の父と尊敬された人である。『宮古史伝』の言う飛鳥爺出自説は、少なくない郷土史研究家に支持されてきた。

③慶世村恒任が、「飛鳥爺を炭焼き太良の次女・目娥月の子」と解釈した理由は、『宮古記事仕次』（1748）より20年も古い旧記が、『雍正旧記』（1727）として存在したこと。もう1つの理由は、この『雍正旧記』に「昔西銘間切之主こぜさかりと申すもの之男子童名真徳金云うもの有」の記録があり、また、首里王府の正史『球陽』に「西銘郡主古世佐嘉利に1男有り。乳名を真徳兼と曰ふ」と記されたことによるものである。「こぜさかり」と「古世佐嘉利」は同一人物で、西銘間切之主または西銘郡主も西銘按司と同一人物である。

④しかし、『宮古史伝』のしるす飛鳥爺の出自説には、矛盾点がある。1つ目は、炭焼太良が次女を箕隅村に嫁がすことは不自然である。居士佐加利に嫁がせたのではなく、婿取りをしたと解することが理に沿っている。2つ目は、飛鳥爺と於母婦の結婚は不自然である。つまり、飛鳥爺を目娥月の子とした場合、於母婦の父である西銘按司は、炭焼太良の入り婿で目娥月の夫でなければならない。飛鳥爺と於母婦の二人が、目娥月の子であるはずがない。

3つ目は、『宮古史伝』で2代目西銘按司の時に5ヵ村はつくられていたと記述しているが、これも矛盾している。5ヵ村は、間違いなく飛鳥爺になってからである。

⑤これらのことから、『宮古史伝』の飛鳥爺出自説の見直しが求められていた。

市町村合併後2012年発刊された『宮古島市史』第一巻 通史編では、飛鳥爺の出自について『宮古島記事仕次』に基づく記述がされた。宮古島市総合博物館の飛鳥爺に関する家系図も『宮古史伝』説から『宮古島記事仕次』説に訂正された。

⑥飛鳥爺の実績は5ヵ村をつくったことである。西銘村、おわて村、かたて村、いこむ村、きやけ村の5ヵ村である。その位置を現在の地積図にしると次のようになる。

西銘村・・・平良字東仲宗根添 小字サガーニ、小字北増原

おわて村・・・平良字東仲宗根添 小字南増原、小字瓦原

いこむ村・・・平良字東仲宗根添 小字宮積、小字ムテヤ

かたて村・・・城辺字長間 小字山川、小字真良瀬嶺（隅原）

きやけ村・・・城辺字長間 小字長間 小字前野底（キヤーギ）

⑦飛鳥爺亡き後の西銘村は、一時は廃村となったが、間もなくして再建されたと考えられる。

理由は、飛鳥爺を討った石原城主思千代按司は、糸数大按司に滅ぼされたこと。大野山林の肥沃な畑「いもひげもり」は炭焼太良一族の管理となっていたからである。「いもひげもり」を初めて開墾したのは、炭焼太良の長女とその夫・根間の角かわら天太大氏のである。その次は、飛鳥爺の従弟・糸数大按司が管理し、そして目黒盛豊親見が手にした。また、長間田は仲宗根豊親見によって管理されていた。これらの土地は、飛鳥爺が領地にしていた所であることから、西銘村は存続していたと考えられる。

⑧飛鳥御嶽の始まり・時期については、旧記と文献に記録が残されている。

『雍正旧記』、『球陽』、慶世村の『宮古史伝』、稲村の『宮古島旧記並史歌集解』の中から飛鳥御嶽の始まり・時期を探ってみた。稲村と慶世村は「旧城の中に御嶽をたて祭事をとり行う」、「〔飛鳥〕爺の死後之を祀り飛鳥御嶽と称した」と明確である。雍正旧記(1727)は「旧城へ香花を祭り上げ候」、球陽は「祭品を備へ、飛鳥城を拝謁してもって弔祭を為す」と祭祀の記録を残している。その時期は「廃村後」と不明であるが、『球陽』では「近世」となっており、その文脈からは1725年頃と考えられる。

⑨飛鳥御嶽の年間祭祀は1. タテバン、2. 麦プース、3. 先アープース、4. 後アープース、5. ユースタミ・シツ、6. ユークイ願ひ、7. ヤーキダミ、8. トスノバンの計8回である。麦プースの祭祀に、シートダスキとプースダミを併せて祈願しているので、それを加えると、年間祭祀は10回となる。祭祀集団は南増原、山川、隅原集落の人びとが中心である。

⑩飛鳥御嶽の祭神への遙拝所(中通イ御嶽)は、宮原地域8カ所、長間地域5カ所、添道4カ所、市街地西里3カ所、西仲宗根2カ所、下地地域2カ所、高野地域、細竹地域、野原越地域、東仲宗根荷川取、城辺福里は各1カ所である。合わせたら30カ所になる。数多くの遙拝所がつくられた理由としては、2つ考えられる。1つは、飛鳥爺一門(西銘按司、目黒盛豊親見、仲宗根豊親見の血族集団)が各地に移住し、遙拝所をつくったこと。2つめは、飛鳥御嶽がつくられた経緯に示されたように、飛鳥爺の怨恨を鎮めるため(マラリアの感染症を防ぐため)、飛鳥御嶽の遙拝所をつくったことによるものである。

謝辞

飛鳥御嶽の祭祀については、南増原のサズ役を勤めた西里源一・ヨシ子ご夫妻、仲宗根玄昭・ハル子ご夫妻から、懇切丁寧なご指導を賜った。また、南増原の方々からも貴重なお話をうかがうことができた。地図と写真の貼り付けについては、市博物館学芸員にお世話になった。記して感謝申し上げます。

参考・引用文献

1. 稲村賢敷 1962『宮古島旧記並史歌集解』琉球文教図書
2. 稲村賢敷 1972『宮古島庶民史』（1972 三一書房 初版 1957）
3. 沖縄県教育委員会 1990『沖縄県文化財調査報告書』第 94 集 「グスク分布調査報告書」
宮古諸島
4. 慶世村恒任『宮古史伝』（復刻版 1976 初版 1927）
5. 球陽研究会『球陽 読み下し編』角川書店（初版 1974 再版 1978）
6. 『広報みやはら』第 3 号 1999. 6. 5
7. 下地和宏 1983「飛鳥爺の時代 ―村落の消長をめぐる―」『宮古研究』第 4 号宮古郷
土史研究会 1-21 頁
8. 砂川玄正 2009 翻刻版『宮古島記事仕次』
9. 忠導氏正統家譜」（『平良市史』第三巻資料編 1 前近代 平良市役所 1981 所収）
10. 平良勝保 2002「紙上特別講演 宮原の歴史」宮原自治会広報『みやはら』第二巻
11. 多良間村教育委員会 1993『多良間村史』第 4 巻 資料編 3
12. 仲宗根將二 1988『宮古風土記』ひるぎ社
13. 長浜幸男 2015「山北（宮原・高野）の集落と御嶽」『宮古島市総合博物館紀要』第 19
号宮古島市総合博物館 1-52 頁
14. 長浜数子 1979「宮古歌謡とピャーシグイ論（上）」―歌謡と場の関連を中心に―『沖縄
文化』第 16 巻 1 号 沖縄文化協会 43-64 頁
15. 長浜数子採集資料「粟穂祭りの皿ぴゃースあーぐ」（東仲宗根添・シタスク）外間・新
里編 1978『南島歌謡大成』宮古篇
16. 仲地清成 2006「飛鳥御嶽」『宮古の歴史と文化を歩く』沖縄県歴史教育者協議会宮古支
部 60 頁
17. 平良市教育委員会 1994『平良市史』第 9 巻資料編 7 御嶽編
18. 「雍正旧記」1727（『平良市史』第三巻資料編 1 前近代 平良市役所 1981 所収）
19. 「向えい氏家譜」（『平良市史』第三巻資料編 1 前近代 平良市役所 1981 所収）
20. 「白川氏家譜」（『平良市史』第三巻資料編 1 前近代 平良市役所 1981 所収）
21. 宮国定徳 1975『宮古の史跡・文化財』光村オフセット印刷
22. 宮古島市教育委員会 2012『宮古島市史』第一巻 通史編 みやこの歴史 サン印刷
23. 『宮古島市総合博物館図録』第 1 集―旧家資料編―「木刻拝領地之図」
24. 「宮古島記事仕次」1748（『平良市史』第三巻資料編 1 前近代 平良市役所 1981 所収）
25. 新里恒彦 2014『宮古島英雄伝』むぎ社



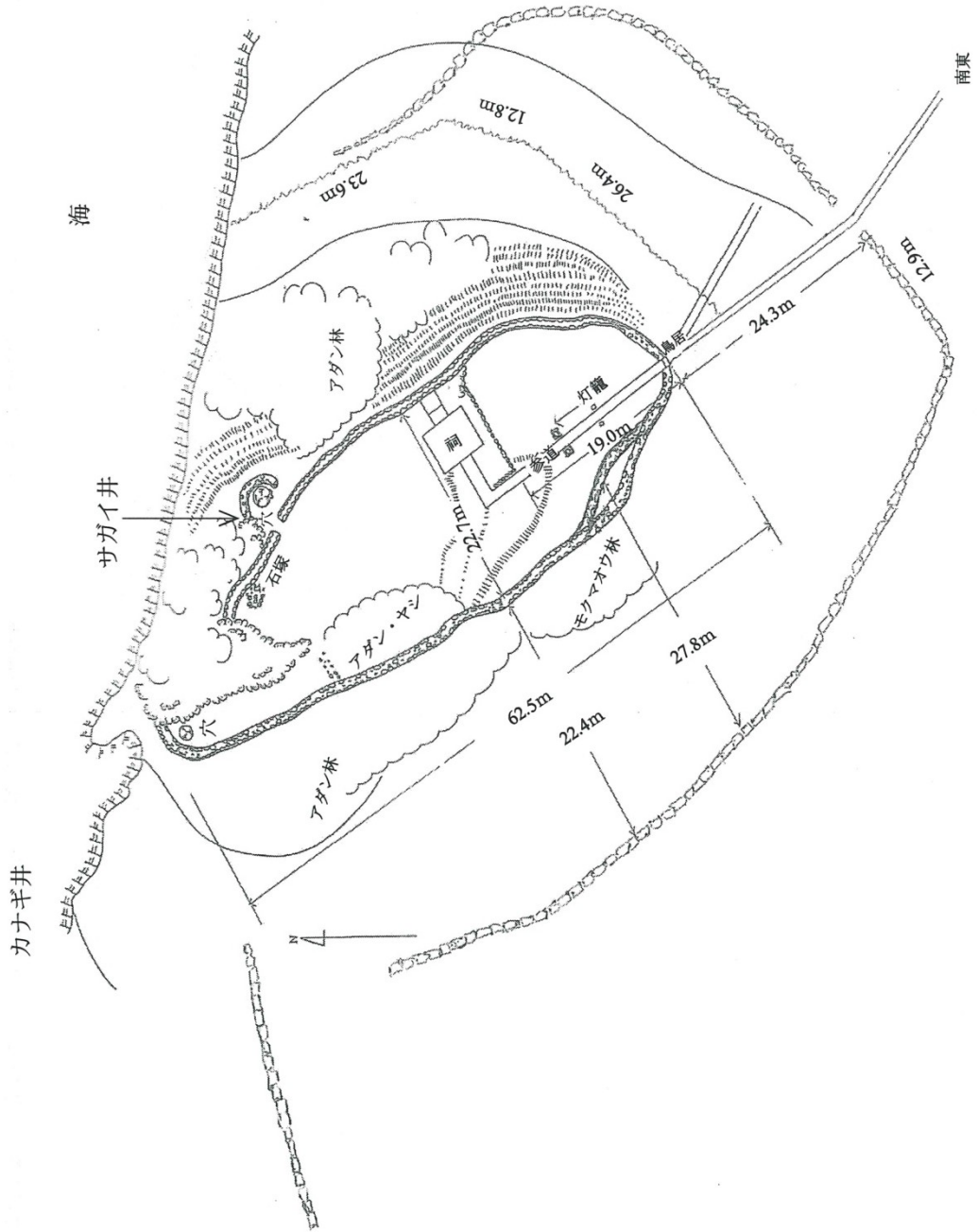
1. 飛鳥御嶽の祭壇 (2014. 5. 14)

2. 飛鳥御嶽のわら算 (2014. 5. 14)

3. フーツキョーカ祭 (2014. 12. 29)

4. 飛鳥御嶽の参拝者 (1992. 7. 8) 仲宗根將二提供

付録2 西銘城跡見取り図



『グスク分布調査報告書（Ⅱ）－宮古諸島－』（沖縄県教育委員会 1990）

